

令和 6 年 5 月 5 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00414

研究課題名（和文）ルネサンス期イタリアの英雄詩における直接話法の配置と効果

研究課題名（英文）The placement and effect of direct discourse in verse of heroic poetry of Renaissance Italy

研究代表者

村瀬 有司 (Murase, Yuji)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：10324873

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：アリオストの『狂えるオルランド』の直接話法のなかから詩行1行に収まる短い台詞を対象に、その総数、連内・行内の位置を整理し、タッソの『エルサレム解放』とボイアルドの『恋するオルランド』のデータと比較した。その結果、アリオストは1行以内の直接話法を連の中央、及び前半部に多く配置していることが明らかになった。話者の感情をしばしばダイレクトに表現する短い台詞を、ボイアルドとタッソはもっとも目につく連末尾の8行目に置いてその効果を最大限に発揮させている。これに対して『狂えるオルランド』では、短い台詞は連の前半もしくは中央に配置されて、登場人物の感情を抑制して描き出す形となっていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ルネサンス期イタリアの英雄詩の直接話法の配置と効果を検証した論考は、これまで存在しなかった。台詞の連内の配置と効果を部分的に取り上げた論考は存在するが、本研究のように15、16世紀を代表するボイアルド、アリオスト、タッソの英雄詩の直接話法を網羅的に整理し、そのデータに基づいて作品の特徴を分析した研究は、恐らく前例のないものと思われる。本研究では、特にアリオストの『狂えるオルランド』の台詞の配置を考察することで、いままでない観点からこの英雄詩の特徴の一端を明らかにすることに貢献した。本作品がルネサンスのイタリア詩の最高傑作とみなされているだけに、この研究成果の意義は大きいと言える。

研究成果の概要（英文）：

This study examined short utterances fitting within a single line of Ariosto's "Orlando Furioso", organizing their total count and their distribution within stanzas and lines and compared them with data from Tasso's "Gerusalemme liberata" and Boiardo's "Innamoramento de Orlando". The results revealed that Ariosto places a large number of direct speeches within one line in the center and in the first half of the stanza. The short lines, which often directly express the speaker's emotions, are placed by Boiardo and Tasso in the most highlighted eighth line - at the end of the stanza - to maximize their effect. In contrast, in "Orlando furioso," I found that the short lines are placed in the first half or the center of the stanza to depict the characters' emotions in a restrained manner.

研究分野：ルネサンス期のイタリア詩

キーワード：直接話法 イタリア詩 アリオスト 8行詩節 タッソ ボイアルド 台詞の配置

1. 研究開始当初の背景

ルネサンス期のイタリアを代表するボイアルド、アリオスト、タッソの英雄詩は、いずれも8行詩節という詩形で書かれている。この定型詩のなかで、物語の登場人物の台詞がどのように配置され、どのような効果を上げているかという問いが、本研究の出発点となっている。

報告者は、タッソの『エルサレム解放』の直接話法についてその配置の特徴と効果を考察し、その過程で、上記の三詩人の作品(『恋するオルランド』『狂えるオルランド』並びに『エルサレム解放』)には、直接話法の連内の配置に共通する傾向が存在することを明示した。登場人物の台詞が連の奇数行(特に1行目)から始まり、偶数行(8行目)で終わりやすいというこの傾向を基準点としながら、そこからずれた配置の直接話法に着目することで、タッソの作品の特徴の一端を実証的に明らかにした。

このような直接話法の配置に特化したルネサンス期の物語詩の研究は、本国イタリアにおいても他の西欧諸国においてもなされた形跡がない。本研究は、これまでに報告者が収集した直接話法のデータをもとに、これまでにない観点から物語詩の場面構成・読者に及ぼす効果・詩人の創作意図を明らかにするという意図とともに構想された。

2. 研究の目的

イタリア文学の最高傑作の一つに数えられるアリオストの騎士物語を対象に、直接話法の連内の配置の特徴を抽出しながら、その効果、詩人の意図、作品の本質的特徴を明らかにすることを目的としている。

アリオストの『狂えるオルランド』は、イタリアはもちろんヨーロッパ諸国の研究者によって様々な観点から考察がなされている物語である。この作品内の直接話法については、今世紀に入ってから、ナラトロジーに基づく考察、連内における台詞のシンタックス構成に着目した分析、あるいは行内の韻律を検証した研究成果が存在する。しかし、この騎士物語に存在する直接話法の総数、長さ、配置の傾向、発話を導く導入表現の位置といった基本情報が明確にされないまま、個別のトピックに応じて散発的に研究がなされるにとどまっている。

本研究では、アリオストの騎士物語に現われる直接話法のデータを整理したうえでその数値をボイアルドの『恋するオルランド』ならびにタッソの『エルサレム解放』と比較しながらアリオストの作品の台詞の特徴を特定し、そこからこの作品特有の直接話法の様態・効果、そして詩人の創作姿勢の一端を明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

『狂えるオルランド』の直接話法のデータを、ボイアルド、タッソの英雄詩のそれと比較することによって、アリオストの騎士物語に現われる台詞の配置・長さ、あるいは導入表現の特徴を明らかにする。その上で、その特徴から作品内の台詞の効果、及び詩人の創作姿勢を考察するという方法をとる。

研究に当たっては、適宜、タッソとボイアルドの作品の直接話法・導入表現の特徴も考察の対象とし、それらの効果と各々の詩人の意図について理解を深めながら、アリオストの騎士物語の台詞を分析していく。

4. 研究成果

『狂えるオルランド』と『恋するオルランド』それに『エルサレム解放』の直接話法のデータを比較して再確認されたのは、アリオストの騎士物語では、8行詩節の連の形式に対応した2行単位のシンタックス構成が、直接話法の配置に一貫して見られるという事実である。奇数行から始まり偶数行で終わる直接話法の展開、行頭におかれた導入表現から台詞が始まるオーソドックスな出だし、11音節詩行の末尾で発話が閉じられる調和的な末尾など、アリオストの作品においては、規則的な直接話法の配置が他の二作品に比べて顕著となっている。タッソの英雄詩に見られるような、特異な位置での台詞の始まり・締めくくりによって特殊な効果をもたらす創作

技法は、『狂えるオルランド』では少数の事例に限定されている。

この特殊なケースとして、本研究は2つの問題を考察した。一つは『狂えるオルランド』の11音節詩行1行に収まる短い直接話法の配置である。このような短い台詞は、演説のような一定の長さを持つ発話とは異なり、話者の感情や、登場人物が置かれているその場の状況を反映しやすい。ボイアルドとタッソの作品では、この種の短い台詞は、8行詩節の要所である8行目におかれてその効果を最大限に発揮している。これに対して、アリオストの騎士物語では、1行の直接話法は、連の中央(4,5行目)あるいは前半(1,3行目)に配置される傾向にあり、8行詩節の末尾に置かれる例は相対的に少ない。これらの個々の事例を具体的に検証した結果、『狂えるオルランド』では、短い台詞は、それにつづく語り手の叙述とともに連を締めくくる傾向にあること、すなわち一つの連の締めくくりを登場人物の発話にゆだねるのではなく、語り手が自らの言葉でその連を結ぼうとする姿勢が顕著になっていることを明らかにした。

あわせて、一行の台詞の具体的な事例として、『狂えるオルランド』の第43歌に見られる瀕死の騎士が語る最期の一言(正確には、語りきれなかった言葉)を分析し、この台詞が連の4行目の途中で終わっていること、その後ろには語り手の叙述がつづいてその行を締めくくっている点を検証しながら、アリオストが作品のもっともパセティックな場面において、登場人物の劇的な台詞で連あるいは行を締めくくるのではなく、感情のうねりを抑えるかのように、語り手の言葉で状況をコントロールしながらその行・連を閉じていることを明示した。

そして、このような短い台詞の配置が、アリオストの騎士物語にみられる全般的な傾向、対象に対して一定の距離を置いてしばしば皮肉な観察を試みる、語り手の理知的な姿勢と重なり合っている可能性を指摘した。この研究成果についてはすでにイタリア語で草稿を完成しており、今後修正を加えたうえで海外の学術雑誌に投稿する予定である。

もう一つの問題は、『狂えるオルランド』にみられる3行の直接話法の存在である。該当する発話は計22例(直接話法の総数の3.5%)であり、ボイアルドとタッソの作品(各8.9%、5.0%)に比べてその比率は小さいが、そのために作品内のイレギュラーな形態として注目に値する。本研究では、アリオストの8行詩節において5+3に代表される奇数のシンタックス構成が、しばしば不穏な状況や、登場人物の不安を描く際に使われているという先行研究の指摘を参照しながら事例の分析を行った。

その結果、該当する直接話法は連末尾の6-8行目を占めることが多く、またしばしば1+2という文構成で3行の台詞が展開されていることを明らかにした。そして、この破格なシンタックス構成が、いくつかの例において、登場人物の言い争い、地獄に響く声のような超自然の存在、グロテスクな状況、あるいは身分を明かす登場人物の劇的な言葉を表現するのに使用され、特有の効果を各場面にもたらしていることを確認した。一方で、3行の台詞の大半を占める6-8行目の配置については、同じく6行目から始まるものの8行目で終わることなく次の連にまで展開する、3行以上の長さの直接話法についても考慮する必要がある。この事例の分析結果を踏まえたうえで、最終的な研究成果を海外の学術雑誌に投稿する予定である。

また、上記のアリオストの作品の直接話法の研究に関連して、トルクァート・タッソの1行の直接話法の事例の分析を行い、その研究成果を欧文紀要に発表した。あわせて、タッソの『エルサレム解放』における行の途中で終わる直接話法の効果について包括的な考察を行い、その成果を学術論文にまとめ上げた。この成果については拙著の一章として発表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yuji Murase	4. 巻 1
2. 論文標題 Studio statistico dei discorsi diretti nella "Gerusalemme liberata"	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studi di lingua e letteratura italiana del Dipartimento di italianistica dell'Universita' di Kyoto	6. 最初と最後の頁 65-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yuji Murase	4. 巻 2
2. 論文標題 "Or qui riedo": modalita' e funzione della breve enunciazione di Armida nel canto decimo della "Gerusalemme liberata"	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Studi di lingua e letteratura del Dipartimento di italianistica dell'Universita' di Kyoto	6. 最初と最後の頁 63-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村瀬有司
2. 発表標題 「トルクアート・タツソの詩論における「本当らしさ」と「驚異」について」
3. 学会等名 日本ミルトン協会第13回研究大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------